



TITLE:

学会抄録 第50回近畿皮膚科泌尿器科集談会（泌尿器科の部）

AUTHOR(S):

CITATION:

学会抄録 第50回近畿皮膚科泌尿器科集談会（泌尿器科の部）. 泌尿器科紀要 1957, 3(10): 658-661

ISSUE DATE:

1957-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111516>

RIGHT:

学 会 抄 録

第50回近畿皮膚科泌尿器科集談会（泌尿器科の部）

昭和32年 5 月12日 於 関 西 医 大

特 別 講 演

急性腎不全に就て 楠隆光（阪大教授）

急性腎不全と称される、乏尿乃至は無尿を主症状とする一群の腎機能障害は、最近泌尿器科領域に於てその主要性を増しつつある。この疾患群に就て綜説的に述べ、自家経験の10例を報告して、次の結論に到達した。

1) 本症の腎機能障害は一過性の尿細管障害によるもので、約10日後には利尿期に入り、数日間の多尿の時期を経て治癒する。

2) 故に無尿期並びに利尿期に適切な治療を施せば、患者の一命をとりとめ得る。無尿期の治療としては、摂取水分の1立までの制限及び高張糖液の大静脈内点滴静注を基礎として、RN が 200 mg/dl 以上になった時には切札として人工腎或は同種腎移植法を応用する。

3) 利尿期には、電解質の異常消失による血液電解質の不平衡を補足しなければならぬ。

一 般 演 題

1. 女子尿道憩室症例 金沢稔・瀬川陽一（和歌山医大）

1) 42才、分娩5回を経た経産婦。25才時初回妊娠第4ヵ月頃より膣前壁の腫瘤に気付き疼痛を訴え、分娩後自覚症状は消失、其後妊娠分娩毎に同様の症状を繰り返していたが、6年前、最終分娩6ヵ月後に膣内の疼痛、腫脹が再現、昨年7月之等症状が増強し、婦人科を訪れ、当科に紹介された。2) 38才、経産婦。昭和28年7月頃から膣内の不快感及び外陰部の鈍痛を訴え、時々尿閉を來した。2例共、膣前壁に腫瘤を認め圧痛あり、圧迫により外尿道口より膿汁を排出する。尿道鏡により何れも憩室開口部を認めた。第2例のみ剔除したが憩室壁は移行上皮及び筋層を認め尿道壁のそれと一致する組織所見であり、真性憩室に属する。本症例は本邦に於ける第23、24例目に当る。本症の診断、治療特に手術術式に就き主として述べた。

追加 新谷浩（京大）

最近我々の教室でも2例経験したので追加する。

1) 42才、家婦。組織片より Carcinoma simplex を証明した。2) 29才、バーマダム。分泌液より淋菌を証明した。

2. 巨大副睾丸嚢腫の1例 高木峻徳・森昭（大阪医大）

41才、男子。約1年前より漸次左陰囊内容が無痛性に腫脹し来院す。触診所見では左睪丸に接しこれと同等大の緊満性、弾力性硬、透光性を有する腫瘤1個を触知す。手術によりこの腫瘤は副睾丸頭部全体よりなる略々鳩卵大の嚢腫と判明、これを摘出す。嚢腫壁は菲薄な結合織よりなり、頭部実質は殆んど萎縮或は一部消失を示す。嚢腫内容液は約20cc で水様透明、鏡検により1視野に1~2個の活動性を有しない精子を証明す。主睪丸、副睪丸体部及び尾部、精管には異常を認めなかった。

3. 睪丸腫瘍の2例 小林浩・森脇宏・宮脇理（神戸救済会）

1) 28才、沖仲仕。約2年前より右睪丸が腫大す。内鼠径輪で精索を切断後陰瘻す。剔出標本は220g。睪丸の大きいさは10×8×6 cm。組織学的には pure seminoma (Dickson & Moore) であった。2) 30才、工員。約1ヵ月前より左睪丸腫大に気付く。第1例と同様手術す。剔出標本は231g。睪丸の大きいさは9×6.5×5 cm。組織学的には teratoma with seminoma (D & M)。2例共術後、後腹膜リンパ節に対しレントゲン深部治療を施行した。退院後3ヵ月になるが異常を認めない。

追加 酒徳治三郎（京大）

我々の教室にて本年度（昭和32年）1月より現在に至る間に、1) 19才、左奇型腫、2) 29才、右ゼミノーム、3) 42才、両側ゼミノーム、4) 19才、左胎生嚢再発例を経験したので追加する。

4. 膀胱異物（体温計）の1例 西川恵章（和歌山医大）

24才, 女子, 既婚. 2日前, 性戯中夫により, 体温計を挿入さる. 挿入12時間後より, 下腹部痛, 排尿終末痛, 排尿後痛及び軽い血尿あり. 膀胱鏡所見は, 球部を右側に全く横位を占め, 破損は認められなかった. 高位切開により剔出す 指示温度 38.7°C. 本症例は本邦第14例である.

5. 尿道に挿入せる異物の腹腔内迷入について

伊藤瑞・大浦五郎(大津日赤)

開放性肺結核にて約10ヵ月以前より入院中の少々神経衰弱性の19才の男性が, 尿道へ体温計を挿入誤って入り込み, 手術の結果腹腔内へ迷入していた稀有なる1症例を経験したので報告した.

6. 膀胱頂部腺癌の1例 瀬川陽一(和歌山医大)

26才, 男子. 初診の2日前より排尿終末時血尿を来し, 翌日更に高度となつたため当科受診す. 膀胱鏡所見は膀胱頂部の右側寄りに広基性の指頭大, 円形の腫瘍を認む. 治療として膀胱部分切除術を施行した. 組織所見は腺形成の傾向があつて腺癌の像を呈し, 腫瘍細胞は一部粘液様変性に陥っていた. 尿管より発生したものと思われる. 術後経過は良好で, 現在 C_0^{60} 放射線療法を行っている.

7. Denonvillier's fascia の異常会陰部突出部に発生した肉芽腫 前川正信・大江昭三(阪大)

68才, ♂. 馬蹄鉄腎患者の会陰部小腫瘍を検索し, Denonvillier's fascia が骨盤隔膜を貫通して索状に会陰部に下降し, 該部に炎症性肉芽腫を形成した尿路附屬膜畸型の稀有な1例であることを, 臨床所見, レ線所見, 組織所見より証明した. 詳細は原著とする.

8. 症例 (イ)診断上興味ある膀胱頸部癌

(ロ)膀胱憩室治験例 小田完五・久保泰徳・楠瀬信二(京府大)

イ) 68才, 男. 6年前より頻尿及び間歇的血尿を訴え, 中等度の貧血を認めた. 直腸内触診により前立腺部は驚卵大, 半球状に硬く膨隆. 膀胱レ線像で恥骨上部正中に下方より膀胱内に突出せる影像欠損がある. 膀胱容量 50cc で膀胱鏡検査不能. 膀胱全剔出を施行した結果は膀胱頸部前壁に生じた扁平上皮癌で, 前立腺への浸潤はなかった.

ロ) 第1例は74才, 男. 膀胱左側壁に驚卵大憩室があり前立腺肥大症に併発. 第2例は23才, 男. 同じく左側壁に拇指大憩室があり軽度の尿道狭窄がある. 共

に膀胱内外憩室剔出術を施行, 第1例では経膀胱鏡的に同時に前立腺剔出術を行い, 共に全治. 第1例の憩室壁には軽度の白板症を認めた.

9. 興味ある腎水腫の1例 柳井哲雄・西浦力(国立京都)

30才, 女子. 先天性単腎症と考えられ, 結核性腎水腫を併発したもの. 本症例も性器畸型として, 無毛症及び尿管口開大を認め, 同時に巨大尿管像をレントゲン診断に於て認めた. 又その経過を血液残余素量を測定しながら, 治療して非常に効果があつた. なお文献的考察も同時に報告した.

追加 酒徳治三郎(京大)

1) 50才, ♂. 腎盂尿管移行部附着異常による左水腎症, 2) 19才, ♀. 左腎下極に達する異常血管による尿管腎盂移行部圧迫による水腎症. 以上の2例に対し Pyeloureteroplastik に成功したので追加する.

10. 發育不全腎の2例 井本勢太郎・丸毛博昭(阪大)

Fortune の分類によると Hypoplasia に属する2症例で, 第1例は41才の男子, 手術的所見からは所謂 High renal ectopia 或は Thracic kidney に近いものであり, 第2例は22才の女, 左尿管が腔壁に開口していた尿管膀胱外開口の症例である. 本邦報告例51例について2~3観察を行った.

11. 腎実質キサンチン結石例 広井潤(京府大)

50才, ♀. 1年前に胆石症の手術を受け, その際レ線学的に右腎結石を指摘されたが放置していた処, 半年程前から極く軽度の右腰部倦怠感を訴える様になり受診. 尿, 腎機能, 膀胱鏡所見には異常を認めない. レ線による単純撮影, 逆行性腎盂像によると右腎中央部に腎盂像と重つて小指頭大の結石像が見出された. 腎切石術を試みたが容易に成功せず, 腎剔出を行った. 結石は腎盂, 腎盂とは全く離れて腎実質内に占居して居り, 米粒大2ヶ, 粟粒大数ヶの砂礫からなり, 総重量 0.8 g. キサンチンが主成分をなしていた. 結石を囲める腎組織を組織学的にしらべると, 結石に接した部分は特に上皮で被われることなく直接に萎縮した腎実質からなり, その部の糸球体, 尿細管は硝子様変性に陥り, 間質に軽度の円形細胞浸潤を認めた.

12. 尿管及び水腎症に併発した腎結石兼腎玉白板症 前川正信・大江昭三(阪大)

59才, 男子の水腎症及び腎結石に併発した腎盂白板症の1例を経験したので種々考察を加えた。腎盂白板症の本邦に於ける第32例である。腎盂白板症の発生に関し結石及び感染の存在意義の大きい事を再認した。

13. 最近に於ける興味ある症例

a) 陰影陰性結石の両側尿管下部嵌頓による高度の両側水腎症

b) 尿管乳頭腫による尿管全剔除兼部分的膀胱壁切除例 稲田務・仁平寛巳・杉山喜一・山崎巖(京大)

a) 陰影陰性の結石が両側尿管下部に嵌頓せる為に生じた高度の両側水腎及び尿管症で30才の既婚女子, translumbar pyelography によつて診断を確定し, 両側尿管切除術により軽快した。

b) 59才, 男子。主訴血尿。膀胱鏡にて右尿管口より壊死状となつた乳頭腫を認め, 右尿管乳頭腫の診断にて右尿管全剔除及び膀胱部分切除を施行した。右腎は水腎を示し, 右尿管の下1/3の部分に半雞卵大の乳頭腫を認め, 組織学的には移行上皮癌であつた。

14. 重複尿管腎膿瘍兼尿管端囊腫の1例 品川 猛(大阪市大)

患者は33才の既婚男子で, 種々検査の結果, 上記診断を得, 膀胱を切開尿管端囊腫切除施行し, 又左腎臓剔除術施行せるを経験したので報告した。

15. 倭小腎症例 三国友吉・平山栄一(和歌山日赤)

46才, 女。後腹膜腔気体撮影法其他によるX線所見より, 機能廃絶状態にある左倭小腎と診断し, 左腎剔除術を施行した。剔出腎は $4.5 \times 2.5 \times 1.0$ cm, 重量10 g。表面は稍硬さ感があり。又動静脈は腎盂の後方へ入っている。組織学的には固有の腎実質は下極の一部を除く他殆ど消失し, 又部位により萎縮を示している腎実質が若干見られ, 大部分線維化す。その中に高度に退縮した尿管を認め, 又下極は比較的腎実質の構造を示し, 所々壊死に陥れる腎小体, 尿管を認める。尚萎縮に陥れる部位では多数の小円形細胞浸潤を認める。

16. 泌尿器科領域に於て併発せる肺栓塞症について 後藤薫・酒徳治三部・杉山喜一・片村永樹・山崎巖(京大)

血栓による3例, 気体による1例及び粘糊造影剤による1例についてのべたが, 詳細は原著参照(泌尿紀要3巻8号)

17. Klinefelter 症候群の1例 高木峻徳・森 昭(大阪医大)

17才, 男子。約1年前より何等誘因なく両側乳房が漸次女性の如く腫大してくるに気付きて来院す。生来著患を知らず, また遺伝的關係も証明されない。両側乳房共に思春期前の女子の如く腫大し, 乳頭には軽度の色素沈着の増加が認められる。音声は男性化を示すが, 陰茎は短小で陰毛の発生は殆んど認められず, 睪丸, その他副性器の發育も不良。精囊腺X線像では主管の形態小なるも憩室の發育はかなり良好である。睪丸組織像では間質 Leydig 細胞の数における増加及び一部にフィブローシス, ヒヤリン化を認め, 実質では精祖細胞より精母細胞への分裂が障碍され, 精子細胞は極く一部に少数認め得るに過ぎない。所謂 spermiogenesis disturbance の状態を呈する。

18. 血精症に於ける精囊腺組織像に就て 石神 襄次(大阪医大)

血精症を主訴とし精囊X線像に於て著変を認めず, 且精液所見に原因菌の存在を認めなかつた2例に於て摘出精囊腺の組織学的所見に於て同上皮の高度血管拡張と, 崩壊像を認め, 又炎症性変化を全く認めなかつた事実を報告した。所謂血精症の中に本例の如く, 所謂本態性精囊出血と考えられる症例のあり得る事を指摘した。

追加 中尾知足(大阪北市民)

2例の結核性副睪丸炎の患者に一過性の本症を認めた。

19. 男子急性淋疾に対する Penicillin V 使用 経験 新谷浩・酒徳治三郎・日野豪(京大)

原著参照(泌尿紀要3巻6号)

20. 尿管結石の保存的療法, 特に膀胱鏡的操作に就て 山本弘・石原藤太郎・大島升・倉岡 雍男(大阪逓信)

1) 昭和25~31年の間に我々の取扱つた尿路結石患者数は上部尿路76(内, 尿管49), 下部尿路21, 不明1, 計97(泌尿器患者の3.1%)である。

2) 昭和25~32年4月末間の尿管結石患者55例(1人2個の結石を有したもの4例, 従つて取扱結石数は59)に就て, (i) 20~40才に最多, (ii) 男44, 女15 (iii) 右25, 左35, (iv) 腹部21, 骨盤部37, 不明1, (v) 尿管切除術25, 保存的療法33(自然排出29, 異物鉗子1, 蹄係カテーテル1, 転帰不明2), 無処置排出3。

3) 保存的療法で自然排出した29例に就て, (i) 結石の長径 1 cm 以下26, 1.1~2 cm 2, 不明1, (ii) 約1/2は症状発現後 1 カ月以内, 約3/4は治療開始後 1 カ月以内に排出, (iii) 18例のピエログラムに於て高度拡張像無く, 22例の患側腎分尿中細菌を認めたもの1例。

21. 腎盂尿管膀胱腫瘍の手術例 中尾知足・近藤高夫・山口利郎 (大阪北市民)

腎盂, 尿管, 膀胱等に発生せる良性乳頭腫が屢々悪性化して乳頭癌になることは既に成書にも記載されて居るが, 我々の症例では尿管口より乳頭状腫瘍が出て居り, 尿管は腫瘍物質で閉塞されていたので腎盂の状態は不明であつたが, 摘出後腎盂にも乳頭癌が認められた。かように尿管口附近に乳頭状腫瘍を認める場合, 尿管腎盂にも原発して居る事があるので, かかる場合, 腎盂尿管の状態を精査して少しでも疑しい場合には速かに腎, 尿管を摘出せねばならない。本例に於て膀胱を約 1/3切除し尿管腎摘出術を行い膀胱壁にラドンシードを用いた。又摘出標本につき組織学的検査を行つたが, 癌性変化は腎盂で最も軽く, 膀胱で最も強かつた。

22. ホンバンによる前立腺腫の治験 田村峯雄・門脇和敏・山口武津雄・品川猛 (大阪市大) 中尾正宏 (大阪東市民)

広範な転位を有する前立腺癌の 5 例にホンバン (4,4'-dioxy-diethyl-distilben-diphosphate) を用いた。3例では前立腺腫の縮小軟化, 転位巣の縮小と一部消失を見た。治療を経続し経過観察中である。1例は治療中, 1例は治療により一時良好な効果を得たが, ホンバン 250 mg×20 本使用後退院し, その後

4 カ月にして全身衰弱の下に死亡した。手術を拒否した前立腺肥大症 9 例にホンバンを使用した。250mg×10~20 本で臨床症状は著しく改善され, 触診上前立腺腫の縮小を見た。

23. 前立腺癌の根治手術に併用する Honvan 療法について 楠隆光・野村貞一 (阪大)

前立腺癌 4 例, 潜在性前立腺癌 1 例, 組織学的に小腺性増殖を示した肥大症 2 例, 計 7 例について根治手術並びに剔除術に術後除根術並びに Honvan を併用した。その意義は主として再発を抑制防止するにあり, その効果は, 経過観察中である。Honvan の副作用として, 特記すべきものは見られなかつた。又疾病経過並びに治療効果判定には血清フォスファターゼが良き指針となる。

追加 酒徳治三郎 (京大)

前立腺腫瘍に対しホンバンを使用して, その前後に needle biopsy により組織学的検索を行つた。詳細は原著参照 (泌尿紀要 3 巻 7 号)

追加 玉置 明 (京大)

前立腺癌 2 例, 肥大症 3 例について尿中 17-KS 1 日量値をホンバン注射前後に測定した。詳細は原著参照。

追加 後藤薫・山崎巖 (京大)

前立腺肥大症 3 例についてホンバン使用による膀胱内圧の影響を測定した。詳細は原著参照。

回顧談 (第50回近畿皮膚科泌尿器科集談会に際して)

阪大名誉教授 谷 村 忠 保
京大教授 山 本 俊 平

術後疼痛に

ノブロン注

クロルプロマジンとグレランが相乗的に鎮痛作用を増強することは既に確認されている。本剤は更に抗ヒ剤による催眠作用を強化し、術後の鎮痛と安静保持に最も満足すべき効果を発揮する新鎮痛剤である。

新 発 売

ノブロン錠

ノブロン注と同系組成の強力な鎮痛催眠鎮静剤ノ

(包装) ノブロン注A 2cc 10管 ノブロン注B 2cc 10管 ノブロン錠 6錠 100錠
製造 グレラン製薬株式会社 販売 武田薬品工業株式会社



武田販売